

智場05月号目次

- ブログとソーシャルネットワークの現在形 —— 02
公文俊平、楠 正憲、濱野智史、
上村圭介、石橋啓一郎
- GLOCOM と世界情報社会サミット (WSIS) —— 13
アダムJ. ピーク
- メールマガジン・ダイジェスト ————— 15
- GLOCOM Information ————— 16

ブログとソーシャルネットワークの現在形

——進化するグループコミュニケーションツール——

公文俊平 (GLOCOM 代表)

楠 正憲 (PICSY プロジェクト)

濱野智史 (慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程)

上村圭介 (GLOCOM 主任研究員)

石橋啓一郎 (GLOCOM 研究員)

■ ブログというカルチャー

公文 インターネットの普及は着実に進んでいて、ユーザーの数はアメリカでは人口の7割以上、日本でもおそらく5割を超えたのではないかと思います。2年ぐらい前までは、インターネットの主要な使い方はウェブのサーフィンか電子メールでした。最近ではかなり様子が変わってきて、ウェブ自体もただ読むだけではなくてインタラクティブに書き込んだり、マルチメディア的にもなりつつあります。また、オンラインで実際に買い物をするとか、そういうことに普通に使われるようになってきました。さらにブログとかソーシャルネットワークとか呼ばれる新しいタイプのアプリケーションがインターネット上に出てきていて、これがずいぶん急速に普及しているらしい。私もウェブや電子メールぐらいまでは何とかついてきたのですが、新しい動きについていくだけの気力と体力がだんだん衰えてきました(笑)。そこで今日は、そういう新しい試みを活発にやっておられる若い方々にいろいろ教えていただきたいと思います。まず、そもそもブログ(ウェブログ)と呼ばれるものは何なのですか。

濱野 実は、ブログほど何かをはっきりと指し示すことが難しいものはありません。理由は、その言葉に対する定義が人々や時期によって違うからです。もっとも起源、つまり最初にアメリカで "weblog" という言葉が作られた時点では、たとえば現在、代表的なブログ作成ツールとされる "Movable Type(ムーバブルタイプ)" や、ブログを第三者に提供しているブログサービスプロバイダーといった技術的な意味合いはなく、単純にホームページを更新する「行為」に、サブカルチャー的な意味合いが重なったものでした。つまり技術ではなく、「カルチャー」を指し示す言葉でした。まず

ブログという行為があって、次にそれを支援するツールが開発されたわけです。たとえばアメリカにこんな話があります。"blogger" という、まさにブログという言葉そのものを冠しているサービスがありますが、そこで使われているツールは、もとはブログのために作られたものではなかったそうです。ただその開発者が、「このごろブログがはやっているから、そのためのサービスに使うといいんじゃないか」ということで公開したところ、評判になって一般にも普及したということです。その普及過程を通じて、サブカルチャー的な背景をもたない人々にもブログが認知されるにつれ、ブログツール=ブログという図式が定着していったわけです。さらにその「ツール」が近年、日本のユーザーの間に普及してくるようになったわけですが、そこでの受容は少しまた屈折を見せています。というのも日本では、そもそもブログ的なことをしていた人、似たようなツール・文化が、すでに一定の規模と範囲で存在していたからです。

公文 日本では、いわゆるウェブの日記と同じではないかということで、別に目新しいことではないといった反発もありましたね。

濱野 まさにそのとおりで、いまでも根強くあります。

■ リンクを可視化するトラックバック

公文 確かに小さく取ると、個人用のウェブページを頻繁に更新する発信のツールとして使っていたものが、それにいろいろなおもしろいツールが付け加わることによって、実質的にも変わってきたということです。それらの付け加えられたツールというのはどういうもので、どんな特徴がありま

すか。

濱野 はい。ブログの技術的な側面に着目したとき、特に目立つのは「トラックバック」と「RSS」などと呼ばれるブログのメタデータです。メタデータに関しては、それそのものが特徴的なのではなく、その標準化されたデータを利用したブログ間のアプリケーションというか、ブログ間の情報の流れを可視化するようなツールが登場している。その側面が特徴的です。

では、まずトラックバックから説明します。ブログ以前のインターネット上のホームページ同士というのは、リンクを張るにしても基本的に一方通行のものでした。誰が自分のホームページにリンクしているかを知るには、ウェブサーバのアクセスログを閲覧し、どこから誰が飛んで来たのかを知るくらいしか方法がありませんでした。しかしトラックバックは、ブログ間で相互リンクの状態を作ります。サイトをもっている人はもちろん、第三者が見ても、どこからどこにリンクがつながっていているのかが一目でわかります。これがトラックバックのおもしろいところで、初めに実装された Movable Type 以外のツールにも普及した理由だと思います。

公文 自分が他の人のページにリンクを張ることは前からありましたね。そうではなくて、誰が私にリンクを張っているかを知ることができるようになった？

濱野 それはアクセス解析という手法で以前からできたのですが、さらに第三者にも、この人がこの人にリンクを張っているということが見えるようになった。

公文 なるほど、どういう人々がお互いリンクを張り合っているのかを、側から観察できるようになった。

濱野 ただ基本的には、サイトをもっている人が気づきやすいという点が一番大きいと思います。要するに、個人ホームページとブログは何が違うのかということを考えると、「行為」としては大して変わりがありません。ブログがなくても、自分でHTMLを書きFTPでサーバにアップロードするという一連の行為は、今となっては面倒だけれども可能です。しかしトラックバックによって、自分のサイトを見て、自分の

言葉に反応してくれる人がこんなにいるということに気づくことで、サイト更新の動機づけを得られるようになるわけです。動機づけだけでなく、ウェブの構造自体を変えるかもしれません。リンク分析を大規模に行った調査によれば、ほとんどのリンクは相互リンク状態にないという分析結果があります。つまり、ほとんどのサイトが、大規模な検索エンジンポータル——たとえばGoogleやYAHOO!——からしか飛ばないといいことになってしまう。それがトラックバックのおかげで、水平的なリンクが支援されることになったわけです。いうなれば、個人ホームページ間の「出会い」の機会が増えたといえますか。

公文 なるほど、水平的なリンクを見ることができるようになったことで、逆に水平的なリンクを人々が積極的に張ろうとするようになった。そういう相互作用があったということですか。

濱野 そう思います。水平性に加えて、リンク間の文脈もより明確化しやすくなったと自分は認識しています。たとえば日本には「ウェブリング」という習慣があって、趣味の共通したサイト同士のリンクというのは、数多くありました。かりに公文先生と自分がすごく仲のいい友達だったとして、サイト同士のリンクもあるとします。しかし、同じく公文先生と友人である石橋さんが、自分のことは知らない状態としましょう。そこで石橋さんが公文先生のサイトを見たうえで、まだ見知っていない自分のサイトに飛んで来るかということ、それはあまりない。なぜなら、この人の「友達」というだけではなかなかサイトを見る動機づけにならないからです。

しかしブログのおもしろいところは、サイトの中の構造をモジュール化するといえますか、記事ごとにHTMLを切り分ける機能があります。アメリカではパーマリンク(permalink=永続リンク)であるとか、日本ではアンカーリンク——段落ごとにリンクを張るという意味ですが——によって、サイト構造を記事単位・段落単位といった形で独立させることができる。このモジュール化とトラックバックがセットになるとどうなるか。公文先生がスマートモブズについて書いた記事に、僕がスマートモブズについて書いた記事がトラックバックしているとしましょう。するとスマートモブズに関心のある石橋さんは、「スマートモブズ関連の」ト

ラックバックがあるということで、自分のサイトに飛んできてくれる。サイト間のリンクの文脈がより限定化されていることで、より文脈が明確化されたリンクが生まれやすくなったという傾向があると思います。

公文 中身を断片化したということですね。

濱野 そういうことです。

■ RSSでブログ間の盛り上がりがわかる

濱野 もう一つのRSSのほうも、基本的には同じような機能です。ブログのサービスにはいくつかあって、そこで使われるツールもいろいろですか、RSSによってコンテンツをメタデータ化できる。ツールにかかわらず同じ形式で出力することで、みんなが再利用しやすくなった。

公文 そのRSSというのは、Really Simple Syndicationの略ですか。

濱野 それにもいろいろな説があって、RDF Site Summaryの略ともいわれます。RDFというのはXMLのフォーマットのひとつのことです。たとえば伊藤穰一氏がよくtechnorati(テクノラチ) *1というサイトを取り上げるのですが、そのサイトは百万単位のブログの更新状態を常に監視しています。これはまさにスマートモブズでいうところの「協調と監視」の機能を果たしていて、誰が自分に対してリンクをしたというのを自分に教えてくれたり、リンク総数を常に演算しランキングなどで出力しています。そしてこれが可能なのも、その数百万のブログの「更新リスト」がRSSという形で集約されているからなんですね。たとえばweblogs.comという「更新ping通知サイト」というものがあり、そのサーバには世界中のブログが更新通知を送っており、最もシンプルで最速な更新リンク集になっているわけです。このようなメタデータがブログの世界では流通しており、さまざまな形でデータ再利用・再解釈に使われています。

公文 ということは、ブログという一種のネットワークの全体を自分で大きく見る目をもったということですね。単に

第三者が観察するというのではなくて、自分自身を一つの全体として見ることができ、それをもとにして適切な情報をメンバーに送る、あるいは取る、そういう機能ですか。

濱野 はい。くだけた言い方をすれば、ブログの世界でいま何がホットであるかということが簡単に、素早く把握できるようになりました。つまり何らかのパラメータが、コミュニティの情報流通には必要ということですね。ホームページがただバラバラに存在していても、どのサイトが果たして自分にとって有益な情報をもっているのかはわかりません。Googleが登場したときに衝撃だったのは、ページランクというアルゴリズムによって、検索結果の一番上に来ているものが一番いい、とシンプルに序列化されたことでした。またパラメータの例として、たとえば2ちゃんねるでは「1スレッドを何分で消費した」「同名タイトルのスレッドが早くもパート15に達した」とか、「有名なコテハンが降臨した」といったような指標によって、そのスレッドを測る振る舞いがあります。

ブログにしても、先に紹介したtechnoratiに類似したものとして、いま数あるブログの中で、どのURLが最もいろいろな人からリンクされているのか、つまり最も話題なトピックであるのかをリストアップするサイトなどがあります。いままで、話題性あるトピックというのは新聞の「一面トップ」というような指標によって決定されてきたわけですが、実は奥のほうの隠れた記事こそが注目を浴びる、コミュニケーションを惹起するといったようなことが、ブログと、そこで情報流通をパラメータ化することによって起きやすくなっている。

公文 そういうツールを、ブロガーたちが自分でどんどん作っているということですね。

濱野 そういうことです。

■ つながり方を変えるコミュニケーションツール

公文 では石橋君は、そういう流れをどう見えていますか。

石橋 僕がブログをおもしろいと思うのは、いままでウエ

ブ上でのコミュニケーションがたくさん試みられてきたのですが、ブログ以前には、そのためのツールは基本的にはBBS(電子掲示板)ぐらいしかなく、時系列的な対話のコミュニケーションしかなかった。ブログでは、皆が文脈を意識しているけれど意識していないような領域で、自分の世界で手前勝手に物を書いている。しかしそれが互いにリンクされて、一つの知識あるいはコミュニケーションが作られるという形態に変わりました。僕もブログを始めたのですが、実は根性がなくて(笑)、なかなか毎日更新できません。そういう人は結構、多いと思います。ただ、ときどきトラックバックをもらって、見ている人がいるのだということを感じられるので、非常におもしろい。いままではアクセス解析によってどれだけ見られているかを把握するのが主な評価ツールでした。今では、評価の軸が他の人にどのくらい言及されるかということに変わってきたという気がします。ただ垂れ流して見られたというだけではなく、どれだけコミュニケーションをしたかということが、評価につながってきたという感じがしています。

公文 一種の評判システムにもなるわけですね。

石橋 そうです。

公文 そのあたりの機能は、例のorkut*2でしたか、ああいう社会的なネットワークのアプリケーションとも似ているところはあるのですね。

石橋 一面では。

公文 少なくともお互いにどうつながっているとか、メンバーがどれだけいるとか。とはいえ、あらゆる人に公開されているというわけではない？

石橋 ただ、orkutの場合、メンバーの人にしか情報を見せないことになっているとはいえ、つながりがメンバーにすべて見えてしまうので、公開されているといってもいいです。他のソーシャルネットワーキングのツールの中には、メンバー登録されていない人からも情報が見えるようなツールもあります。人間関係がすべてわかってしまうので、おもしろ

いと思う人と不快に思う人がいるようですよ。

公文 監視という言葉はきついけれど、ネットワークそのものが可視性をもってきたということですね。

■ ブログハンターとメタショー

上村 私も細々とやっていますが、自分の書き方が悪いのかほとんどトラックバックはありません。それを期待して始めたわけではないのであまり落胆はしていないのですが、そういう意味では楽しくもないという微妙な感情です(笑)。トラックバックのリンクが濃密に張られる一方で、私のようにそのリンクからもれてしまう人も出ます。P2P、グヌーテラとかWinnyと同じで、リンクがたくさん張られている「クラウド」の中に最初に入らないと入れないものですか。それとも待っていると、しだいにリンクができるものですか。

濱野 そうですね。答えになるかわかりませんが、まさしく「ベキ法則的な状況」というのがブログの世界にはあると思います。みんながブログという平等な情報発信・水平的リンクのツールをもつようになったからといって、結局リンク構造は極大の誰かに集まる傾向があります。カリスマ的な存在は出てくる。公文先生が翻訳された伊藤穰一さんの"Emergent Democracy"*3の中で、ロス・メイフィールドによるブログのネットワーク分析結果を参照していましたが、ベキ分布が指摘されていました。ただブログの人気の循環というものは非常に速く、明日にはガラッと変わるということもあります。昨日まで1日数十アクセスであっても、次の日には何十倍ということもある。

これはなぜかという、ブログのネタを探している人たちがいて、常に自分のブログでピックアップできる何かおもしろいものはないかと、ハンターのようにウェブ上のリソースを巡回して見て回っているからです。最近のヒューレット・パッカー社研究所の調査*4でブログ間の情報の流れを調べたところ、著名なブロガーたちというのは必ずしもオリジナルなネタを提供しているのではなく、より知名度の低いブログから頻繁にトピックを借りている、つまりオリジナルのネタではないということが明らかになっています。これは日本のネット界で以前から常識的に知られてきたことで、ネタの

窃盗行為であるから問題だというのではなく、いわばニュースの鮮度と独自の視点・切り口の競争がそこには存在する。トピックをめぐるそういう生態系があって循環しているので、いつリンクの状況が劇的に変わるかはわからない。何ともいえないところですよ。

上村　いま話を聞いて思ったのですが、ブログは、そのものというよりも、何々についてのコンテンツというのが多いじゃないですか。ある記事についてこう書いたとか。

濱野　オリジナルの一次情報に対する、二次情報ということですね。

上村　そういうのばかりが増える傾向にありますか。

濱野　そうですね。これは仕方のない側面もあります。確かに、たわいない二次的なコメントが氾濫するばかりで、おもしろい記事を書く人は埋もれていく一方ではないのかということですね。情報社会学若手研究会でも、鈴木謙介氏がこんな印象をもらしていました。「最近始まったブログサービスの新着記事を一日数十件ザッと見ている、なぜこの人たちはオリジナルの記事に対して、こんなつまらないコメントを書いているのだろうと思ってしまう」と。実は自分も、始めたばかりの自分の過去の記事を見ると、実に短いコメントをつけるばかりでつまらないものですから、自分でも微妙な気持ちを抱きます(苦笑)。これはよくいわれることですが、ブログが登場したからといって、皆が皆、オリジナルな体験と取材と調査に基づく一次情報を、新聞社・通信社顔負けでジャーナリズム的に発信するという事態は訪れていません。今後も、おそらくそうでしょう。

公文　少なくとも単なる一個人として、極端に言えば他人に読まれなくてもしかたがない、自分に興味があることを書いているだけだというのでは必ずしもなくて、むしろそれこそ「群がり」というのか、書き手たちはおもしろそうなテーマを探して流動していて、何か見つかるワットと寄って来る。それが、さらに別の人にリンクを張ることで張られた人を押し上げて、押し上げた結果、ある人のところにリンクが集中するという階層構造が出現するけれど、それで固定してしま

うわけではなくて、また別のテーマが見つかる動く。一種のモブ行動というか、別の言葉でいうとダイナミックな智のゲーム、つまり比較的短期間で勝負がついて、たくさんのリンクを集めるブログが立ち上がっていくが、しかし、またたちまち流動していくのですね。ところで、楠さんはどういう形でブログをやっているのですか。

楠　ぼくは三日坊主になってしまっているのですが、ライターの仕事をやっていると思うのは、ブログで書くか記事にするのかということです。そういう評判ゲームに使えるような話を、ライターとしてはなぜそこに出さなければいけないんだという悩みがあります。日記サイトは1999年ごろにやっていましたが、ブログと日記が違うカルチャーだと思うのは、僕のまわりの人々は圧倒的にシステム管理者が多くて、彼らの日記は「これをインストールした」というTipsみたいな、備忘録的な側面が強く、かなり個人的だったのが、ブログはもう少し社会的です。すごく視線を意識していて、カラオケ的な、注目を浴びることに対する喜びなのか、それ以外に何か大事な側面があるのかにはすごく興味があります。個人的にはブログのトラックバックによるつながりというのは、これまでのグループウェアとは全然違う可能性を秘めていると思います。いまナレッジマネジメントを見ているとすごく問題だと思うのは、既存の実社会にあるグループにマッピングする形で、サイトがホストされていくことです。そうすると、本当に共通の関心事をもっている人のグループとは別の可能性がある。個々人の関心が先にあってそこからセルフオーガナイズさせていくのはブログ的なネットワークで、グループウェアはある共通の関心事に対してラベリングをして、そのラベリングされた共通の関心なり、組織に対してプラットフォームを提供するという考え方です。いまみたいに一般に公開されたブログだけではない使い方、たとえば社員が仕事の報告をするために、日報をレポートラインにあげるのではなく、バラバラにブログを書くのが当たり前になって、組織変更のときにブログのトラックバックを見ながらチーム編成を考えるような時代というのが来るのではないかというのが、いま関心としてあります。

公文　いまカラオケにたとえたのが、たいへんおもしろい。つまり、プロの歌手が歌っているという話ではない。プロの

作家が書いて発表しているわけではない。むしろ一種の集合行動で、自分の好きな歌、おもしろいと思った歌をうたう。自分も楽しいけれど、その間にだんだん多くの人が支持する歌の形が見えてきて、仕上げられていくという構造なのかな。テーマを先に与えておいて、これについて議論しましょうではなくて、個人がたまたまおもしろいと思ったテーマに飛びつくのだけれど、全く孤立してやっているわけではなくて、それこそ群がりの中でやっているわけだから、そうしたことはすぐ他の人にも見える。そしてちょっとおもしろいなと思うと、またくっついてという形でワットと広がっていく。

濱野 本当にそうですね。ブログだけではなくてメッセージとか携帯とか、口コミでワットと広がる。

公文 そこで起こっていることは、まさに創発ですね。つまりブログは、ばらばらの個人の営みというよりは、群がりの中での個体の集合行動であって、それぞれがローカルにまわりを見渡しながら勝手に行動しているのだけれど、全体としてはあるパターンが絶えず出てきて自己組織していく。そういう流れの中にあるのがブログなのだといえそうですね。

そこまでいうと、上村さんはどう反応しますか。

上村 答えになるかわかりませんが、一つ思い出した話があります。『創発』（山形浩生訳、ソフトバンク、2004年）を書いたスティーブン・ジョンソンが "Interface Culture" という本の中で、コンテンツをいくつか分類していて、インターネットではメタショーとかワイドショーとか、何々についてのコンテンツの役割が大きいのだというということを書いていたことがあります。そのときは「なるほど、おもしろい」と思っただけなのですが、ブログを見ているとますますメタショー的なコンテンツが増えている。増えているというよりは、それが主流ではないかというように思えてきます。さきほどはネガティブに「一次的なコンテンツがないじゃないですか」と言ったのですが、もしかすると二次的なコンテンツこそが、これからのインターネットの主流になるのかなと思います。

濱野 そうかもしれません。これはたぶん東浩紀氏（GLOCOM主任研究員）のご専門の話になるとは思います

が、たとえば『動物化するポストモダン』（講談社現代新書、2001年）の中では、オタクたちがオリジナルなコンテンツを作るというよりは、コンテンツはもはや「萌え要素」というモジュールに分解され、そのデータベースの再編成を行うのがオタクたちの表現であり消費の論理になっていると記述されています。そこで東さんはボードリヤールや大塚英志などの消費社会論を引きながら、オリジナルなきコピー（シミュラクル）の再生産である「二次創作」が全面化していると論じるわけですが、ブログなどの普及によって——ブログ自体、アメリカでも日本でもそれなりにオタク的な人々に限られた行為だったわけですが——それはいわゆるオタクに限られた話ではなくなっているという印象が強くなります。また上村さんの指摘されるメタショーについては、鈴木謙介氏の著書『暴走するインターネット』（イースト・プレス、2002年）で、2ちゃんねるのすべてをネタとして楽しむ所作を「ネタのコミュニケーション」として論じられているものと並行しますね。

上村 創発性ということからいうと、私はリンクからはずれているのでなおさら思うのですが、すごい関心コミュニティほど、小さい島がたくさんできているようなことになってくると思います。ですから必要に応じてグローバルにつながるのだけれど、ふだんは関心コミュニティの中に引きこもっていくような、一見タコソボなのだけれど、その枠というのは簡単にうち破れるような、そういうグルーピングができていくのかなと思います。

■ Wikiで荒らしが起きない理由

公文 話がそこまでいったところであらためて質問です。Wikiというツールを使って、インターネットユーザーが協力して百科事典を作ってしまうおうという、Wikipedia*5という試みがありますね。濱野さん、これまでのブログに関する話とWikipediaの関係はどういうふうに理解したらいいでしょうか。

濱野 Wikiの文化的な側面はよくわからないところがあって、個人的な情報ツールとしてはよく使っているのですが、Wikipediaの背景はよく知りません。石橋さんのほうが

詳しいのではないですか？

石橋 僕もそんなに詳しくはないです。

濱野 自分が知る限りでは、Wikiの最初のエンジンであるWikiWikiWebというのはブログよりもかなり以前から存在するもので、それからさまざまな言語に改良が加えられて複数のWikiクローンがあります。自分が大学に入学した1999年にはすでに存在していましたね。

公文 あったんだけど、Wikipediaは確か一度落ち目になっていたんです。それが最近まためきめきと伸びてきて、世界最大といわれるようになってきた。そこを解説してほしいのですが、Wikiとは何か。Wikipediaとは何か。

石橋 Wikiとは何かを客観的に説明すると、たぶんブログと同じくらい人によって答えが違うのですが、たぶん一番中立的な説明は、みんなでウェブブラウザを用いて一つのウェブサイトを書くためのツール群だということになると思います。Wikiの利用者の文化を含めて説明する人もいます。

公文 「文化を含めて」というのは、一人でやるのではなくてたくさんの人が集まって共働して作っている。

濱野 Wikiは基本的な仕組み上、誰でも編集できてしまうものなので、なぜ荒らしが起きないのかが一般的には不思議に思われるツールだと思います。一般的なインターネットのコミュニケーションを見知っている人であれば、誰でも「こんなもの、すぐに荒らされてしまうに違いない」と思うのですが、興味深いことに意外とWikiは荒らされず、平然とWWW上に存在しているような印象を受けますし、それはある種文化的な背景といえるかもしれません。ともあれ同じカルチャーをもつ者が集まったとき、これほどよく機能するコミュニティ協働ウェアはないと思います。

公文 誰かレフェリーがいるとか、決まった基準によってフィルタリングをかけているわけではない。つまり誰がコントリビュートしてもいいのだけれど、その結果、できたものがバグだらけ、うそだらけの情報ではなくて、それなりの質

をもっている。場合によっては商品として売られている百科事典よりももっと新鮮な情報をたくさん含んでいるようなものが出てきている。バクをなくすような、あるいは悪意の参加者をフィルターアウトしてしまうような仕組みの秘密は何でしょう。

上村 クリエイティブ・コモンズの日本語版FAQ^{*6}を作ったときに、実はクローズドなWikiを使いました。そのときWikipediaで活躍されている方に協力してもらって、ちょうどその話を聞いたことがあります。「確かに悪意をもって書き乱そうと思えば、簡単に書き乱せるようになっているのだけれど、実際に書き込もうとする人は全体の1割ぐらいしかなくて、悪意をもって何かしようとする人はさらに限られるから、うまくいっているんです」という言い方を彼はしていました。

公文 でも、百とか千の書き込みのうちの一つでもそういうものがあると、全体の質や評判をものすごく悪くします。つまり信用できないということになる。

石橋 これは直観なのですが、インターネットユーザー、ふつうのユーザーというのは行儀がよくて、荒らしでもいいというサインを出しているところでしか荒らさないという印象があります。2ちゃんねるにはそういう文化があって、「荒らしでもいい」というオーラを発しているというか。これも有名な掲示板であるスラッシュドット^{*7}でも、そういう「突っこみOK」というような文化をもっている。そういうところと、仲間内で和気あいあいとやっているというところがあって、ほとんどのユーザーはそのルールに従って行動しているだけで、深刻な意見の対立がある場合にだけ、例外が起こるような印象を僕はもっているのですが、どうでしょう。

楠 スラッシュドットだって、荒れたのは立ち上がって1年以上たった後ぐらいからです。スラッシュドットや2ちゃんねると比べると、まだWikiのカルチャーはそれほど分母が大きいのではないかと。関心をもつとか、それを知る機会があるということほどいいフィルターはないというか。

石橋 そういわれれば、誰も見ていないところで荒らして

も、あまりおもしろくないかもしれませんね。

楠　　そういう視線やフィードバックを感じるという意味では、スレッドだと経緯が残るから荒らして楽しいけれど、Wikiは経緯が残らなくて、荒らされた結果だけが残るから、荒らしがいとか、それに対するフィードバックはどうやって満足として得るのだろう。

上村　　公園にゴミを捨てるようなものですよ。

公文　　いろいろな説明が出てきましたね。まず一番目が性善説、人間は本来それほど荒らしを好んではない。二番目は発達初期説。今のように小さい間はよいが、もっと大きくなると荒らしが出てくるかもしれない。三番目は、社会契約説。つまりお互いの間にある種の共通了解事項ができているので荒らしが起らない。四番目は、「コード依存」説ともいうのかな。つまり、荒らしてもしかたがないようなアーキテクチャをもっているところでは荒らしは起らない。以上四つの説明は、別に相互背反的ではないけれど、そのあたりはもっと突っ込んで研究してもらいたいところですね。

楠　　荒らされないネットコミュニティーアーキテクチャが作れるかもしれない。

公文　　少なくとも過去のBBSとかメーリングリストなどでは、頻繁に荒らしが起っているわけです。

石橋　　でも、荒らしとフレーミングというのは違うわけですね。

公文　　どう違うのですか。

楠　　荒らしというのは対話を求めていなくて、そこでのインタラクション自体を打ち壊すことが目的で、フレームというのはむしろ激しい意見の対立であって、勝ち負けを求めている。スレッドとかディスカッション型のアーキテクチャが、きわめてそういうフレームや荒らしを誘発するという認識はかなり広まってきています。たとえばアットコスメという化粧品のサイトがありますが、あそこはわざとリプライができ

ないようにしています。化粧品ごとの掲示板で、必ず新しい発言として入れるようにしています。

公文　　そうするとケチがつけられないわけですね。

楠　　いくつ前の発言に、というようなりファーはあるのですが、スレッド型でやるよりははるかに荒らしもフレームも減るとい話です。

上村　　Wikiはリバート(復帰)できますよね。ですから荒らされたらその前の時点に戻すこともできるので、それで実際的に無効化できるし、掲示板みたいなものが建設されますから、もしかしたらそこではフレームとか荒らしっぽいことがあるのかもしれない。

公文　　戻す権限をもっているのは誰ですか。

上村　　それはWikiのソフトにもよります。ユーザーに対して内容を元に戻すためのアクセス権を設定できるものもありますし、アクセス権が設定できなくてもインストールした人や最終的な管理を行っている人には元に戻す権限があると思います。

公文　　するとその人がレフェリー的な役割を果たしている？

上村　　そういうこともあるでしょう。だからWikiの場合、いないように見えても神様はいるわけです。

■ コミュニケーションツールの未来形

石橋　　これまでの議論の中で、いくつかツールが出てきました。みんなでコミュニケーションをしながら知識を生み出す、そういうタイプのツールとして掲示板、Wiki、ブログというのがあるのかなと思います。日本の「はてなダイアリー」*8などは、また別の方向に行っているのですが、掲示板は順番に意見を交換し合うのですが、限界が見えてきたという感じがしていて、その現れの 하나가、2ちゃんねるなどでいわれる「まとめサイト」の登場だと思っています。掲示板上で

情報交換をし、知識が蓄積してきて、みんなが興味をもって継続的に維持されるような話題では、だいたいまとめサイトが作られ、そのコミュニティの人はそっちを先に見に行くようになってきています。つまりコミュニケーションをシーケンシャルに見ていくだけでは知識が読み取りにくいので、一定以上の深みが出てきたら構造化するような文化ができてきています。Wikiは、僕も何度も使っているのですが、他の人が書いた一つの文章に僕も書き込めるというのは何か気持ちが悪くて、責任がもてないということもあるし、利用者間でかなり心が一つになっていないとやりにくい。かなり緊密に連携の取れている、信頼しあっているコミュニティでは機能すると思いますが、ゆるやかにつながっているようなコミュニティではWikiは使いにくい。そういう意味でブログは、発想する人間それぞれが更新する権限をもっており、情報の切り分け方の単位として一番相性がいいという感じがします。一人ひとりが一つのブログをもっていて、それを関連づけるという形式ですから、少なくともそれぞれの人間が知識を作っていくというモードから生まれてくる知識を関連づけていく仕組みとしては一番よいものではないかと思います。逆にグループで知識を総合して一つのものを作り上げるには、もう少し別のツールのほうがいいかもしれません。

公文 さらに新しい何かか欲しいと。

石橋 かもしれないし、Wikiの進化形なのか、ちょっとよくわかりません。

楠 そう意味でいうと、コミュニティのアーキテクチャとして、ブログは発散と創発にすごく向いていて、Wikiはむしろ収束を前提としているような。

濱野 そうですね。"WikiWay"という書籍を邦訳されているyomoyomoさん*9という方が、「ブログはフロー型(即時性)で、Wikiはストック型(持続性)であり、この両者の連携が今後のWWWでの情報発信の課題となる」と表現されているのですが、自分が両方使うなかでもそのような印象を強くもっています。

これは個人的な体験談に過ぎませんが、Wikiは相互編集を旨としますが、更新のクセはしばしば人によって違うもの

ですから、複雑なものになるとどこがどう更新されたのかわからなくなってしまうこともしばしばあります(差分表示をする機能も実装されていることも多いのですが)。複数人で相互編集的に使うには、システム的にはではなく、リテラシー的に少し難しいという印象です。

上村 目的がはっきりしたものでよね。

楠 そうですね。2人で一つの本を書くから、じゃあやろうとか、そういうときでないとうつうはうまくいかない。

石橋 あるいはこのページは誰々のものとか。

公文 Wikipediaのようなものは？ たくさんの人が参加していますよね。

楠 Wikipediaは特殊だと思います。ただ百科事典だとはっきり決まっていますし、書く内容もある程度決まっていますから。プログラムも、たとえば共同開発のログを残すページとか、はっきりフォーマットが決まっていればうまくいくという印象があります。

公文 なるほど。目標とフォーマットをきちんとしておくと、コラボレーションしやすい形になるのではないかという話ですね。

楠 それぐらい決まっていれば、本当に便利なツールだと思います。

公文 さらに違った説明も考えられそうです。たとえば生物の進化でいうと、外側に自然選択という仕掛けがあってそれが神様の役割を果たして、進化している当人たちの間には目的についての明確な意識はないわけです。システムの外に評価なり選択をするような機能があって、こちらはそれで足りている。つまり、システム自体は目的をもっていなくてもいい。それと似たような意味で、つまり、はっきりしたレフェリーとかコントロールのパワーをもった個体なり部分がないまま、人々が集まってきて行動している間に、なぜか自然に選択らしきものが行われる結果として、おもしろ

い協働作業ができるような仕組みは考えられないのか。もちろん、個人がローカルな目だけでなく全体を見る目をもっている可能性がある社会システムという社会的ネットワークの場合、そういう仕組みだけに頼っているシステムというものはたいへん考えにくい。しかし、ことによると今後、とくにはっきりした評価者や制御者を内部にもたないでも、なぜか全体がある基準から見ると良くなっていくとか、欠点を取り除かれていくように進化していく社会システムが生まれてくることはありうるのではないだろうか。

石橋 ある意味では、システムそれ自体がすでにそういう役割を提供していて、検索エンジンのGoogleはそれに近い役割を果たしている面があると思います。最初に濱野君がいていたブログをRSSを使ってランキングするようなサービスも、そういう役割を果たしているような気がします。他に、生態系としてそういう構造ができあがっている部分もあるでしょう。ニュースサイト系のブログが多くあります。「この人はいったい1日にいくつサイトを見ているのだろう」というくらいたくさん、たぶん百以上のサイトを巡回してとにかくおもしろいものをその人の視点で選んで勝手にリンクしているのを、結構みんなおもしろがって見ているのですが。あの人は何がおもしろくてやっているのかが不思議です。さっきブログは流動的だという話が出ましたが、役割の固定化はあって、ニュースという形でしか情報提供しないサイトがあります。そういうサイトが流動性を生み出す源泉になっている、一つのレイヤを作っている気がします。そういう役割の人は、少なくともブログの世界では、構造を規定するルールとか役割を負っているような感じがします。

公文 それは、ある意味で自然にできあがってきたということですね。ほとんど生態システムでいう食物連鎖みたいな形で、ある種の人々があるところにいてある種の役割を果たしている。

石橋 ただ、その役割が彼らにとってどういう意味なのかがよくわからない。

楠 何か社会的なつながりとして視線を感じたりとか、自分の関心を共通の関心事として吐き出していくのは、基本的

に快楽ですよ。見返りがなくて本当に長期間持続するのかなというのは疑問ですが。

公文 一種の新しい流れとして、インターネットや情報社会の中に、ある種のグループ・コミュニケーション、ないしグループ行動を支えるための、さまざまなソフトウェアやそれらのソフトウェアの出現に役立つようなアーキテクチャが創発しつつある。それが、大きく見ると「社会的ネットワーク」の流れであり、群がり型のモブ行動とより密接にかかわりがあるらしい。今日は、そういうことを話し合うことができたと思います。これはぜひもう一歩、二歩つっこんで、理論的にさらに深い分析ができるのもっとおもしろいと思いますので、次回の宿題としてみなさんで考えてみてください。

濱野 さきほど石橋さんがちょっと「はてな」の話をしたのですが、日米文化差という要素も大きいと思っています。はてなダイアリーという現在、日本最大級のブログに類似したサービスがあるのですが、その大変興味深いところというのは、トラックバックを基本的には使っていないところ。トラックバックというのは、「だれそのブログに送るぞ」と自分で送信しなければ成立しないプロトコルです——実は仕組み的にはもう少し緩いのですが——。しかしはてなダイアリーでは、たとえば公文先生と自分が「スマートモブ」という共通の単語を使っていると、両者間をつなぐそのスマートモブというキーワードへのリンクが自動で生成されるというアーキテクチャになっています。つまりこれは、明示的に誰から誰にリンクしたということを問わずに、中立的なシステムがその双方向リンクの責任を肩代わりするという仕組みです。独立した主体間で明示的にコミュニケーションを応酬するというディスカッション的な文化の薄い日本には、このシステムのほうが向いているのではないかと。

公文 つまり誰かに評価されたという気持ちをもたなくて済む。

濱野 そうです。そのほうが普及したという背景があります。

公文 それも一つのテーマとして詰めて考えていきたいも

のです。つまり、いわゆる文化差のようなものが実際にどの程度影響しているのか。絶えず新しいものが起こっているとき、特に外国から入ってくるときに、すぐそれに飛びつくという傾向もなくはないのですが、より多く見られるのは、それがこれまで日本になかったのは文化が違うからで、そういうものは日本には合わないという指摘がまずなされる。しかし、しばらく経ってみると、すっかり普及している。ワープロやインターネットのときもそうでしたが、そういう過去の経験はケロッと忘れて、いやブログは文化が違うから日本に根付くことなんかないよという話をまたまた始めてしまう。私も、文化の違いによる影響が全然ないとは思わないのだけれど、その手の議論をするときはとりわけ注意が必要です。断定するのではなくて一つの仮説として考えてみるのが大事ですね。たとえばトラックバックの張り方が日米で違うとことの説明として、どういう価値観をもっている人たちの間ではどのように受け入れられそうかということ、理論的な仮説としてまずたててみる。さらにそれだけではなく、実際の観察から得られたデータをもとに議論できると、それはまたそれで非常に面白い。情報社会学にとっての宿題としてぜひ考えていきたいことです。

(2004年3月16日GLOCOMにて収録)

- *1 technorati <<http://www.technorati.com/>>
- *2 orkut: Googleが試験的に始めたソーシャルネットワークサービス
- *3 邦訳は、公文俊平訳「創発民主制」[2003] GLOCOM Review 8-3 (75-2) <http://www.glocom.ac.jp/odp/library/75_02.pdf>
- *4 Hotwired JAPAN: 「人気ウェブログは頻繁に『無断引用』——ウェブログ間の情報の流れを解析」 <<http://www.hotwired.co.jp/news/news/20040309206.html>>
- *5 Wikipedia <<http://ja.wikipedia.org/>>
- *6 クリエイティブ・コモンズ・ジャパンFAQ <<http://www.creativecommons.jp/faq/>>
- *7 スラッシュドット ジャパン <<http://slashdot.jp/>>
- *8 (株)はてなが提供する、無料のウェブ日記サービス。利用者が登録するキーワードリストに該当する語句が日記に登場すると自動的にリンクが張られ、同じキーワードを用いているほかの日記と関連づけられるなど、独特の機能をいくつかもっており、多くの人に支持されている。ブログの一種であるという説明もあるが、トラックバック機能がないなど、昨今の狭義のブログとは機能的に若干異なる。
- *9 YAMDAS Project <<http://www1.newweb.ne.jp/wa/yamdass/>>

GLOCOMと世界情報社会サミット(W SIS)

——第1フェーズのジュネーブサミット(2003年12月10日～12日)——

アダム J. ピーク (GLOCOM 主幹研究員)

GLOCOMは、2002年7月の第1回準備会合から2003年12月のサミットまで、公式の世界情報社会サミット(W SIS)準備会合のすべてに参加してきました。本稿では、これまでのGLOCOMの役割と貢献について説明したいと思います。

GLOCOMがW SISにかかわるきっかけとなったのは、2002年7月に日本政府から要請を受けたことでした。W SISのアジア太平洋地域の準備会合が東京で開かれることになり、アジア太平洋地域のNGOの参加支援と調整について、GLOCOMに協力を要請してきたわけです。これを受けてGLOCOMは、会議のアジェンダ作りを手伝い、公式のNGOセッションの開催と、NGO代表の全体の議論参加を確保することができました。

東京会合の宣言案を起草するための起草委員会のメンバーには各国政府代表らとともに二つのNGOが入ったのですが、GLOCOMはそのうちの一つであり、宣言案については、マルチステークホルダーによるオープンな会合を開いて徹底的に議論をしました。

またGLOCOMは、他のアジアのNGOグループとともに、本会合の前にNGOのサイド・イベントを開催しました。このサイド・イベントの成果の一つが太平洋島嶼国会合です。それまで、そうした国々がW SISやその他のグローバルなICT (Information & Communication Technology)政策過程に参加する機会はほとんどなかったのですが、この会合によって初めて積極的に参加することになったわけです。以来、太平洋島嶼国はW SISに積極的に参加し、発言を行っています。

さらにGLOCOMは、国連開発計画(UNDP)、世界銀行インフォデブ・プログラム、アジア開発銀行と協力して、アジア太平洋地域の途上国の人々が会議に参加できるようフェローシップを実施しました。このフェロー

シップの資金によって、21カ国33組織から35人が東京会合に参加することができました。2003年12月のジュネーブ・サミットについても、同地域から3人が参加できるように資金を確保しました。

2003年5月には、W SISの宣言案と行動計画案に対し公式に貢献しました。提出した文書では、三つの問題について触れました。つまり、「情報社会とアクセシビリティ」「インターネット・ガバナンス」「グローバルなICT政策立案におけるユニバーサルな参加」です。当時、W SISの文書案は、障害を持つ人や高齢者のニーズをほぼ無視していました。GLOCOMが提出した文書は、重要な問題としてアクセシビリティを取り上げた最初のものでした。その後すぐに、障害者グループが非常に活発に働きかけを行い、最終的なW SIS文書においては障害を持つ人や高齢者のニーズが適切に反映されました。ユニバーサルな参加が、サミットの文書の中で行動のための項目の一つとして明確に認められたのです。私は、GLOCOMの提案が、W SISの宣言案と行動計画案によく反映されていると思います。

インターネット・ガバナンスはW SISにおいてもっとも議論のあった問題の一つで、コフィ・アナン国連事務総長に対し、インターネット・ガバナンスと関連する公共政策問題を定義するためのワーキング・グループを設置するよう求めることになりました。GLOCOMはW SISにおけるインターネット・ガバナンスについてのあらゆる議論に活発に参加し、この問題に関する市民社会側の参加者のオーガナイザーの一つでもあります。したがってGLOCOMは、この問題で引き続き重要な役割を担うことになるでしょう。

またGLOCOMは、W SISに向けた日本のNGO調整委員会の設立も手伝いました。この調整委員会は、W SISの宣言案の起草過程でコメントを提出しましたが、

自然災害や紛争状態からの回復期におけるICTの役割についてのコメントが評価され、WSISの最終ジュネーブ文書に反映されているようです。

ジュネーブ・サミットの間、GLOCOMは日本の総務省と協力し、「ユビキタスなネットワーク社会への展望」と題するワークショップを開催しました。また、公式のサミット・プログラムの一部として、「モバイル技術の文化的・社会的インパクト」と題する独自のサイド・イベントも主催しました。このサイド・イベントには、日本の他にイタリア、カナダ、スイス、スウェーデン、国連、インドネシア、フィリピン、ウルグアイ、タンザニアからスピーカーが参加しました。

GLOCOMは、WSISの市民社会の非常に活発なメンバーであり、WSISの市民社会の事務局である市民社会局のメンバーでもあります。GLOCOMは市民社会のインターネット・ガバナンス会議における主要組織の一つとして、WSISの準備過程を通じて市民社会の文書起案に貢献しています。

(訳：土屋大洋)

■ GLOCOM『智場』No.98
発 行 ■ 学校法人 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
〒 106-0032 東京都港区六本木 6-15-21 ハークス六本木
Tel. 03-5411-6677 Fax. 03-5412-7111

発行人 ■ 公文俊平

発行日 ■ 2004 年 5 月 1 日

制 作 ■ 『智場』編集チーム

濱田美智子

田熊 啓

浅野 真

■ Copyright 2004 by Center for Global Communications, International University of Japan